

T O C H I G I

# 県民だより

# 1

2003  
月号

## 県民の皆様、あけまして

## おめでとびげんごします

知事に就任して以来、早いもので二年  
余が経過いたしました。

様々な面で変革が迫られる厳しい時代  
の中にあつて、皆様と共に明るく未来を  
切り拓いていくためには、何よりも確固  
とした理念が必要であると確信し、自立  
と自助、そして互助による幸福の追求で  
ある「分度推譲」の理念に基づき「とちぎ  
づくり」「分度推譲立県」を昨年、新たに打  
ち出しました。多くの皆様の御理解を賜  
り、確かな手応えを感じております。

今年はいよいよ、県政の中長期ビジョ  
ン「とちぎ将来構想」を取りまとめる参り  
ます。この構想では「分度推譲」を基本理  
念として、次代の担い手を育て教育や人  
づくり、自然や環境との共生、生活を支え  
る医療や福祉を含めた産業の活性化など、  
これからの栃木県づくり、さらには国づ  
くりの方向性を明らかにし、新たな政策  
づくりにつなげて参る考えです。

私は、こうした取組を「とちぎから創る  
二十一世紀の日本」という気概を持って  
皆様と共に進めていくことが、本県の將  
来像である「活力と美しさに満ちた郷土  
「とちぎ」の実現につながっていくもの  
と確信しております。

本年が皆様にとって素晴らしい年とな  
りますことを心からお祈り申し上げ、新  
年のごあいさつといたします。

平成十五年一月

栃木県知事 福田昭夫



# と、そして人

作曲家

船村 徹(ふなむらとおる)さん

数多くのヒット曲を生みだしてきた歌謡界を代表する作曲家。主な作品に「別れの一本杉」「王将」「矢切の渡し」など多数。船生村(現塩谷町)出身。とちぎ特使。



新春にあたり、福田知事と作曲家 船村徹さんに「ふるさと、そして人」をテーマにお話しいただきました。司会 は佐野由希子さんです。

## ③ 論より手が出るガキ大将



**佐野** あけましておめでどうございませう。新春知事対談ということで、新春にふさわしいゲストをお迎えしております。作曲家の船村徹先生です。

**知事・船村** おめでどうございませう。

**佐野** 船村先生は、塩谷郡の船生出身ということですが、昨年第一回の栃木県民栄誉賞も受賞されました。その時のお気持ちはいかがでしたか。

**船村** 何とんでも自分の生れた所で認めていただいて、こういうものを頂戴できる、それが一番うれし、ありがたいと思いましたがね。

**知事** 船村先生のご活躍は誰もが存じ上げております。すくなく、私としても、第一回目の県民栄誉賞を大先輩の船村先生に差し上げることができて、本当に喜んでおります。

**佐野** お二人には、共通点がたくさんあるように感じます。同じ今市高等学校です。

**船村** まず高校が、私の方がいくらか先輩なんですけど、同じ今市高等学校です。

**佐野** ほかに、いろいろいると共通点があるように感じます。この中で、「新春知事対談カルタ」をご用意させていただきました。まずは、「論より手が出るガキ大将」。お二人ともガキ大将だったんですね。

**船村** 小学校の頃、知事のお父さんに叱られました。私の通っていた小学校の先生をなさっていいね。これもまた本

当にご縁でした。

**知事** そうですね。実は、私も大変なガキ大将だったんです。ただ、小学校の先生が大変厳しい方で、ですから、自分で自分の気持ちをまずいって押し殺すといいますが、そういう術を覚えていったかなと思っております。しかし、ガキ大将の素質はずっと持ったままです。

**佐野** ガキ大将たちは、どんな遊びをされていたんですか。

**船村** あの頃は、今みたいにゲームなんてないで、う。だから学校から帰ってきたらかばんをぶん投げて外に……。それとね、可愛がついているワゴンちゃんなんか、イタチとかムジナとか、いたずらするんですよ。そうすると、イタチ退治に行こうなんて言っていました。

**知事** 何となく山、川、田んぼ、畑が遊び場所です。私、私が小さい頃は、川では釣りがなくてヤス突きというのができたんです。そういう魚の捕り方が、性に合っていますね。

**船村** そうですね。山、川、田んぼ、畑が遊び場所です。私、私が小さい頃は、川では釣りがなくてヤス突きというのができたんです。そういう魚の捕り方が、性に合っていますね。

**知事** 船村先生もですが、私も末っ子なんです。私にも兄がいて、大学を卒業したら地元へ帰ってきて、高校の先生になるというので、母に許可をもらって大学に行きました。ところがその兄が、放送記者になっちゃったんですね。母親は一人で小百(今市市)に暮らしていたもんですから、私もどうしようかと思つて、大学四年の

り、畑をつついてみたり。そうですね。私の母も、元は教員をしていたんですが、辞めてからは慣れない農作業を本当に一生懸命やっていました。ですから、いま見ると指が曲がっちゃっている。

**佐野** お母様は、船村先生の曲をどんなふうにお聴いてらしたんでしょう。

**船村** 聴いてはいたんですけど、う。今その辺ではやっていると、おまえが作つたと言っているんだが、そんなことはないよな」と聞くと、そんなことも言うわけなんです。そうすると、うれしそうな顔をしていらんですよ。ただ、「東京だヨおッ母さん」、あの時だけ「今度作つたつて言っているのは、よくできたんじゃないのか」と言われてね。あれ一曲だけなんです。

**知事** 船村先生もですが、私も末っ子なんです。私にも兄がいて、大学を卒業したら地元へ帰ってきて、高校の先生になるというので、母に許可をもらって大学に行きました。ところがその兄が、放送記者になっちゃったんですね。母親は一人で小百(今市市)に暮らしていたもんですから、私もどうしようかと思つて、大学四年の



母が寝めたは唯一曲  
母の見せたは道一筋



**知事** さて続いては、お二人を育てたお母様のお話をうかがいたいんですが、どんなお母様だったんですか。

**船村** これは明治の女性です。これは、母親が寝ている姿というのはいくら見ても、早く起きて、裏の方を歩いた

夏休みに母に手紙を書いたんです。私も外へ就職していいかと。そうしたら、返つてきた母の手紙が、「ツバメの巣を見てごらん。小さい時は親が面倒を見るけど、一人前になったら一人で飛んでいくんだ。お前もどこに行つてもいいよ」と、こういう返事なんです。それを讀んだ時に、「ああ、私は家へ帰ろう」と決めたわけなんです。

**知事** 人間には少し、あまのじやうな気が持ちはあると思うんですが、帰つてこいと言われたら帰つてこなかつたかもしれない。「どこに行つてもいいよ」と言われたために、「いや帰る」と、逆に決心がついたんでしょね。



鬼怒川の水が満たせし友の盃







